

夫婦関係と養育態度が子どもの問題行動に及ぼす影響

楊 依梵¹・清水 寿代²

Effects of marital relationship and parenting styles on children's problem behaviors

Yifan YANG¹, Hisayo SHIMIZU²

Abstract: The purpose of this study was to examine the influence of marital relationships on children's problems, mediated by a mother's parenting style. An online survey was conducted on 350 mothers (mean age: 35.06 years), with children aged 3-6 years (mean age: 4.19 years), to assess the effect of their marital relationship on children's problem behaviors, and their parenting styles. The independent variable was the marital relationship, the dependent variable was children's problem behaviors, and parenting styles constituted the mediating variable. The results showed that marital conflict mediated authoritarian parenting style and affected children's problem behaviors. Marital conflict, mediated by permissive parenting style, influenced children's prosocial behaviors. In addition, authoritarian parenting style mediated the relationship between marital support and children's problem behaviors.

Key words: marital relationship, problem behavior, parenting style

目的

幼児期は急速に発達する時期である。特に、2歳から6歳までの期間は、乳幼児期から自律性が育ち、さらに社会的・認知的能力が高まる重要な移行期である (Campbell, 1995)。幼児期の発達の変化は、子どもが新しい環境に適応し、それに合わせて自分の行動を調整することを必要とする。また、この時期は、問題行動が増加する時期でもある (Campbell, 1995; 2006)。子どもの問題行動は、Achenbach et al. (1987) の分類に基づき、攻撃的行動や非行的行動などの外在化行動と、抑うつ、不安、引きこもりなどの内面的な状態の反映として定義される内在化行動の2つに大別して概念化されている。Campbell (1995) は、就学前の子どもの問題行動に関する多くの研究をレビューし、問題行動

の特徴を、悲しみ、不安、社会的引きこもり、恐怖などの内在化行動と、過活動、攻撃性、衝動制御不良、かんしゃくなどの外在化行動にまとめている。

これまでの就学前の子どもの対象とした先行研究では、子どもの問題行動はその後の人生において長期的な困難をもたらす可能性があることが明らかになった (van Lier, Vitaro, Barker, Brendgen, Tremblay & Boivin, 2012; Hirshfeld-Becker et al., 2007)。幼少時に問題が出現した場合で対応が適切でその後の経過が良好ならば問題が継続したり再発したりする可能性は小さくなり、一方で問題が放置されたりさらに悪条件が重なってしまうと二次的、三次的な問題が発見することが分かってきている (内田, 2008)。したがって、問題行動への早期対応への必要性が高まり、幼児期の子どもの問題行動に影響を及ぼす要因を検討する研究が行われてきた。これまで主に学校や地域などの家庭外の要因と家庭内の要因が探求されてきており、その中で、

1 広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程前期

2 広島大学大学院人間社会科学研究科附属幼年教育研究施設

家庭環境要因は人口統計学的変数（家庭の社会的経済的状況、家族数や構成など）、親自身の特徴（犯罪歴や精神疾患など）、親の養育態度と養育意識（親の子どもに対する監督役割：スーパービジョン、しつけの厳しさ、親の子どもに対する心理的な拒否感など）、家庭内の対人関係（夫婦関係など）に分類される（菅原, 1999; Loeber, & Stouthamer-Loeber, 1986）。

両親はともに子どもの情緒的要求に適切に対応し、子どもの生活ケアや教育責任と愛情を持って遂行する中で子どもの愛着の対象であり、子どもにとって発達に大きな影響を及ぼす「重要他者」の役割を果たしている（内田, 2008）。夫婦関係の中でも特にネガティブな側面である夫婦間葛藤が子どもの発達や適応の多側面にネガティブな影響を及ぼすことが明らかになっている。夫婦間葛藤は、子どもの不安や抑うつ、非行や不登校、認知発達や学業成績の低さなどの様々な問題をもたらすことが指摘されている（Eldik, WM et al., 2020）。本島（2013）は家庭内で暴力に曝されている子どもは、社会的コンピテンス、精神病理、全般的健康など、幅広い側面にわたって否定的な影響を受けると述べた。これまでの研究は夫婦間葛藤に着目して検討されてきたが、菅原（2002）は夫婦間の愛情関係と子どもの精神的健康の関連について検討したところ、配偶者間の愛情関係と子どもの抑うつ傾向との間に相関は見られなかったと報告している。また、菅原（2002）の研究では、夫婦間の葛藤と子どもの抑うつとの相関は総じて弱いと指摘されていることから、夫婦関係が子どもの抑うつに影響する際には媒介的な役割を果たす変数が存在することが予想される（Fincham, 1998）。本研究では夫婦関係と子どもの問題行動を媒介する変数として養育態度を取り上げて検討する。

これまでの知見より、親の養育態度は子どもの発達に影響を与えることが明らかになっている。例えば、母親の「暖かさ」は子どもの抑うつ傾向（菅原ら, 2002）や学校不適応感を減少させ（MaCoy, George, Cummings, & Davies, 2013）、「懲罰的しつけ」は子どもの抑うつ・不安に影響を与えた（Stormshak, Bierman, M-cMahon & Lengua, 2000）。また、親の養育行動は子どもの反社会的行動（Carlo et al., 2011）や社会的スキル（戸々崎・坂野, 1997）にも関連していることが指摘されている。菅原ら（2002）は夫婦の愛情関係が養育態度を媒介して子どもの抑

うつ傾向と関連するかどうかを検討した。その結果、母親から父親への愛情の強さが子どものへの暖かい養育につながり、子どもの抑うつを弱めることが示された。しかし、抑うつのような内在化的問題行動だけではなく、子ども外在化問題行動と向社会的行動への影響も確かめることが必要である。そして、こうした養育態度のうち、暖かさや過干渉だけではなく、放任といった養育態度の側面についても検討されることが求められている（菅原ら, 2002）。

以上より、本研究では、3～6歳をもつ母親を対象に、養育態度、夫婦関係と子どもの問題行動の関連について検討することを目的とする。仮説は以下の通りである。仮説1：夫婦間葛藤が権威主義的と放任的な養育態度を媒介し、子どもの問題行動に正の影響を及ぼし、向社会的行動に負の影響を及ぼす。仮説2：夫婦間サポートが指導的な養育態度を媒介し、子どもの問題行動に負の影響を及ぼし、向社会的行動に正の影響を及ぼすと予測した。

方法

調査対象 クラウドソーシングサービス「クラウドワークス」に登録している3～6歳児をもつ母親400名を対象とした。不備のあった50名を除外し、350名（母親平均年齢35.06歳（ $SD = 5.31$ ）；子ども平均年齢4.19歳（ $SD = 1.13$ ））を対象に分析を行なった。

調査時期 2021年10月及び2022年1月に実施した。

調査内容

(1) フェイスシート

母親の年齢、最終学歴、就業形態、子どもの人数、子どもの年齢と性別、同居家族を尋ねた。子ども全員の年齢と性別を記入した上で、3～6歳の子どもの二人以上いる場合は、3～6歳の子どもの中で、一人をイメージして回答して答えるよう教示した。

(2) 養育態度

野崎・中村・齋藤（2014）の日本語版 The parenting styles and dimensions questionnaire（以下 PSDQ）を用いた。この尺度では、親の養育態度について尋ねるものである。「まったくしない」～「いつもする」5段階で回答を求めた。下位尺度は3つで、指導的な養育態度は27項目（項目例：「私は子どもに、何か困ったことがあれば話すように促す」）、権威主義的な養育態度は20項目（項目例：「私は、理由を説明するよ

りも罰することで子どもを正しい方に導く)], 放任的な養育態度は15項目(項目例:「私は、子どもが誰かに迷惑をかけていてもそのままにしておく」)であった。得点が高いほど各下位尺度の傾向が高いことを示している。

(3) 問題行動

Sugawara, Sakai, Sugimura & Matsumoto (2006) の日本語版 Strength and Difficulties Questionnaire (以下 SDQ) を用いた。下位尺度は5つで、情緒的問題は5項目(項目例:「頭がいたい, お腹がいたい, 気持ちが悪いなど, よくうったえる」), 行為の問題は5項目(項目例:「カッとなった」), かんしゃくをおこしたりする事がよくある), 多動/不注意は5項目(項目例:「おち

つきがなく, 長い間じっとしてられない」), 仲間関係の問題は5項目(項目例:「一人でいるのが好きで, 一人で遊ぶことが多い」), 向社会的な行動は5項目(項目例:「他人の気持ちをよく気づかう」)であった。得られた回答より, 逆転項目を処理した上で, 「あてはまる = 0点」, 「まああてはまる = 1点」「あてはまる = 2点」として得点化し, 各下位尺度の合計点は0-10点となる。困難さに関する4つの下位尺度(情緒の問題, 行為の問題, 多動/不注意, 仲間関係の問題)の合計点は, 「総合的困難さ(TDS: total difficulties score)」(0-40点)として計算する。なお, 向社会的行動の下位尺度は得点が高いほど適応が良く, それ以外は得点が高いほど

Table 1 各尺度の基礎統計量

	平均	標準偏差	最小値	最大値	α 係数
母親の年齢	35.06	5.31	22	57	
子どもの人数	1.74	0.70	1	5	
子どもの年齢	4.19	1.13	3	6	
指導的な養育態度	106.94	10.97	79	132	.88
権威主義的な養育態度	45.87	9.66	24	76	.85
放任的な養育態度	37.44	5.85	22	54	.62
情緒の問題	2.48	2.18	0	10	.65
行動の問題	2.63	1.59	0	8	.30
多動/不注意	3.63	2.06	0	10	.52
仲間関係の問題	3.77	2.13	0	9	.49
総合的困難さ	12.51	5.49	0	29	.72
向社会的行動	7.48	2.19	0	10	.73
夫婦間葛藤	9.88	3.94	4	20	.87
夫婦間サポート	16.02	3.97	4	20	.87

Table 2 各尺度得点の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1. 指導的	1.00										
2. 権威主義	-.23 **	1.00									
3. 放任的	-.35 **	.41 **	1.00								
4. 情緒的問題	-.05	.24 **	.23 **	1.00							
5. 行為の問題	-.19 **	.37 **	.19 **	.23 **	1.00						
6. 多動/不注意	-.13 *	.32 **	.27 **	.32 **	.40 **	1.00					
7. 仲間関係	-.05	.22 **	.11 *	.27 **	.28 **	.29 **	1.00				
8. 総合的困難さ	-.15 **	.41 **	.29 **	.69 **	.64 **	.73 **	.69 **	1.00			
9. 向社会的行動	.34 **	-.10 +	-.29 **	-.06	-.18 **	-.20 **	-.15 **	-.21 **	1.00		
10. 夫婦間葛藤	-.16 **	.27 **	.30 **	.17 **	.22 **	.08	.02	.17 **	-.16 **	1.00	
11. 夫婦間サポート	.10 +	-.15 **	-.12 *	-.05	-.17 **	-.09	-.06	-.12 *	.09 +	-.27 **	1.00

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

結果

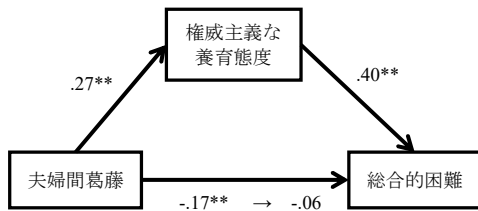
以下の分析には清水 (2016) の HAD (Version. 17_202) を用いた。

各尺度の記述統計量 先行研究の尺度通りに下位尺度を設定し、合計得点を用いて分析を行った。各尺度の記述統計量は Table 1 の通りである。

相関分析 変数間の関連を検討するために相関分析を行った (Table 2)。養育態度尺度のうち、指導的養育態度は権威主義的養育態度と放任的養育態度の間に弱い負の関連 ($r = -.23, p < .01$; $r = -.35, p < .01$) が見られ、問題行動のうち、総合的困難さと向社会行動に弱い負の関連 ($r = -.21, p < .01$) が見られ、夫婦関係のうち、夫婦間葛藤と夫婦間サポートに弱い負の関連 ($r = -.27, p < .01$) が見られた。指導的養育態度は向社会行動に弱い正の関連 ($r = .34, p < .01$)、権威主義的養育態度と問題行動全般、夫婦間葛藤には弱いから中程度の正の関連見られた ($r = .24 \sim .41, p < .01$; $r = .27, p < .01$)。放任的養育態度と情緒的問題、多動/不注意、総合的困難さ、夫婦間葛藤に弱い正の関連が、向社会行動とは弱い負の相関が見られた ($r = .23, p < .01$; $r = .27, p < .01$; $r = .29, p < .01$; $r = .30, p < .01$; $r = -.29, p < .01$)。夫婦間葛藤と問題全般に弱い正の相関が見られ ($r = .17, p < .01$)、向社会行動に弱い負の相関が見られた ($r = -.16, p < .01$)。

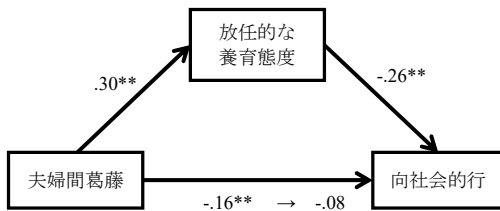
媒介分析 夫婦関係と子どもの問題行動における関連について、親の養育態度を媒介変数として仮定した媒介分析を行った。その結果を、Figure 1, 2と3に示す。

①夫婦間葛藤から子どもの総合的困難さへの影響について 権威主義的養育態度を媒介変数として投入した媒介分析の結果、夫婦間葛藤から子どもの総合的困難さへの直接効果が見られたが ($\beta = .17, p < .01$)、媒介変数として権威主義的養育態度を投入すると効果がなくなった ($\beta = .06, ns$)。このことから、夫婦間葛藤は権威主義的養育態度に影響を与え ($\beta = .27, p < .01$)、権威主義的養育態度を媒介することで子どもの総合的困難さに影響を与えることが示唆された ($\beta = .40, p < .01$)。さらに、ブートストラップ法 (サンプリング回数: 2000, 信頼区間: 95%) により間接効果を検定した結果、有意であった ($\beta = .11, CI [.09, .22]$)。従って、完全媒介が成り立っているとい



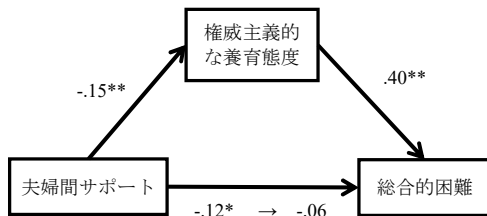
※表示している係数は標準化係数
** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

Figure 1 夫婦間葛藤が権威主義的な養育態度を媒介して子どもの総合的困難さに与える影響



※表示している係数は標準化係数
** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

Figure 2 夫婦間葛藤が放任的な養育態度を媒介して子どもの向社会的行動に与える影響



※表示している係数は標準化係数
** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

Figure 3 夫婦間サポートが権威主義的な養育態度を媒介して子どもの総合的困難さに与える影響

適応が悪いことを表す。

(4) 夫婦関係

直原・安藤 (2021) の Quality of Coparental Communication Scale (以下 QCCS) を用いた。原版の10項目から、離婚後夫婦関係に対する2項目削除され8項目で構成されている。下位尺度は2つで、葛藤は4項目 (項目例:「あなたと配偶者は、子育てについて問題に話し合うとき、言い争いになることはどれくらいありますか」)、サポート4項目 (項目例:「配偶者は、親であるあなたの大変さを理解して支えてくれていると感じますか」) であった。

う結果が得られた。

②夫婦間葛藤から子どもの向社会的行動への影響について 放任的な養育態度を媒介変数として投入した媒介分析の結果、夫婦間葛藤から子どもの向社会的行動への直接効果が見られたが ($\beta = -.16, p < .01$)、媒介変数として放任的な養育態度を投入すると効果がなくなった ($\beta = .08, ns$)。このことから、夫婦間葛藤は放任的な養育態度に影響を与え ($\beta = .30, p < .01$)、放任的な養育態度を媒介することで子どもの向社会的行動に影響を与えることが示唆された ($\beta = -.26, p < .01$)。さらに、ブートストラップ法(サンプリング回数:2000, 信頼区間:95%)により間接効果を検定した結果、有意であった ($\beta = -.08, CI[-.07, -.02]$)。従って、完全媒介が成り立っているという結果が得られた。

③夫婦間サポートから子どもの総合的困難さへの影響について 権威主義的な養育態度を媒介変数として投入した媒介分析の結果、夫婦間サポートから子どもの総合的困難さへの直接効果が見られたが ($\beta = -.12, p < .05$)、媒介変数として権威主義的な養育態度を投入すると効果がなくなった ($\beta = -.06, ns$)。このことから、夫婦間サポートは権威主義的な養育態度に影響を与え ($\beta = -.15, p < .01$)、権威主義的な養育態度を媒介することで子どもの総合的困難さに影響を与えることが示唆された ($\beta = .40, p < .01$)。さらに、ブートストラップ法(サンプリング回数:2000, 信頼区間:95%)により間接効果を検定した結果、有意であった ($\beta = -.06, CI[-.15, -.03]$)。従って、完全媒介が成り立っているという結果が得られた。

考 察

本研究の目的は、3～6歳児を持つ母親を対象に、夫婦関係、養育態度、子どもの問題行動の関連を検討することであった。夫婦間葛藤が放任的な養育態度を媒介し、子どもの問題行動に正の影響を及ぼし、向社会的行動に負の影響を及ぼすが、夫婦間サポートが指導的な養育態度を媒介し、子どもの問題行動に負の影響を及ぼし、向社会的行動に正の影響を及ぼすと予測した。

相関分析の結果、夫婦関係において、夫婦間葛藤は子どもの行為の問題、情緒の問題及び総合的困難さと正の相関を示し、向社会的行動と負の相関を示した。この結果は夫婦間葛藤を扱った従来の研究と同様な結果を示した(菅原、

2002; Emery & O'Leary, 1982)。夫婦間の情緒的な supportiveness が子どもの問題行動にどのような影響を与えるかについて検討した Parkes, Green & Mitchell (2019) の研究では、子どもの幼児期において夫婦の supportiveness の程度が高いと、子ども期の外在化問題行動を抑えることが示されている。本研究では夫婦間サポートと子どもの行為の問題の間に負の相関が見られ、Parkes ら (2019) の先行研究と合致する結果が示された。

養育態度と子どもの問題行動の関連について、指導的な養育態度は行為の問題及び総合的困難さと負の相関を示し、向社会的行動と正の相関を示した。「権威的(指導的)」な親が子どもの発達に良好な結果をもたらすことが報告されており(大森, 2015)、先行研究と合致する結果が得られた。権威主義的な養育態度は子ども問題行動全般(情緒の問題、行為の問題、多動/不注意、仲間関係)と正の関連が見られた。権威主義的な育児スタイルが子どもの行動問題と関連することは先行研究においても認められており、外在化する破壊的行動問題(例:攻撃性、多動性)(Stormshak et al., 2000)や内在化する行動(例:不安、社会的引きこもり)(Cole & Rehm, 1986)との関連を示した先行研究と一致する。放任的な養育態度と子どもの情緒的問題、行為の問題、多動・不注意及び総合的困難さと正の相関を示し、向社会的行動と負の相関を示しており、Campbell (1995) の先行研究と合致する結果が示された。

夫婦関係と養育態度の関連について、夫婦間葛藤が権威主義的な養育態度と放任的な養育態度どちらも正の相関を示し、Krishnakumar & Buehler (2000) の先行研究と一致した。夫婦関係のポジティブな側面である愛情関係と子どもに対する態度との温かさとの間に有意な相関が見られたことを菅原ら (2002) が報告してきたが、本研究では夫婦間サポートは指導的な養育態度をより多く出現する傾向が有意に認められた。その原因として、先行研究は父母両方を対象とし、今回は母親だけを研究対象としたことが考えられ、親の養育態度は配偶者から影響を受け、自分の養育態度を変えたり、強化したりする可能性がある。社会的には父親は指導的な関わり、母親は受容的な関わりという両親の役割、そして、母性原理と父性原理から考えると、父親と母親は子どもに対する成長への期待によって生じる養育態度の方向性は一致するか

どうかあるいは一貫性があるかどうかとも子どもの発達に影響を及ぼすと考えられる。

次に養育態度が夫婦関係と子どもの問題行動を媒介するかを検討した結果、夫婦間葛藤が子どもの問題行動に影響を及ぼすとき、権威主義的な養育態度が媒介し、夫婦間葛藤が子ども向社会的行動に影響を及ぼすとき、放任的な養育態度が媒介することが確認されたことから、仮設1を部分的に支持すると考えられる。夫婦間葛藤が子どもの問題行動や精神症状と関連することはすでに多くの先行研究で明らかにされてきており (Emery & O'Leary, 1982; Eldik, WM et al., 2020), 本研究では子どもの行動の肯定的な側面である向社会的行動についても検討したが、夫婦間葛藤が子どもの向社会的行に影響を及ぼす際に、放任的な養育態度しか媒介しないことが示された。その原因として、放任的な養育態度を取る親は、子どもの意向中心に物事を進め、リミットを設定し守らせることに消極的な受身態度として子どもに自分自身で生活を統制させる。向社会的行動とは、他の個人や集団を助けようとしたり、こうした人々のためになることをしようとしてなされた自主的な行為」とされている (Eisenberg, 1982; Eisenberg & Mussen, 1989)。向社会的行動は思いやり行動とも言われ、見返りを期待しない人のためになる行動であり、愛他行動、援助行動、寄付行動、分配行動、共感性など様々な肯定的な行動が含まれている (戸田, 2006)。戸田 (2006) は母親の養育態度と幼児の自己制御機能及び社会的行動の関係を検討し、母親は子どもが望むままに自由にさせるという服従的養育態度は子どもの向社会的行動である思いやり行動とはマイナスの関係があることが明らかになっており、放任的な養育態度と向社会的行動の間に負の相関があること報告した。一方、戸田 (2006) と同様、母親の統制的である権威主義的な養育態度と子どもの向社会的行動の関連が認められなかった。Erel & Burman (1995) によると夫婦関係の質がネガティブであるため、養育態度もネガティブなものであり、子どもにネガティブな影響を及ぼす。つまり夫婦関係の質は養育行動や態度を通じて子どもに同じ方向で影響する。したがって、夫婦間葛藤が大きくなると、権威主義的と放任的な養育態度に正の影響を及ぼし、子どもの問題行動に負の影響を及ぼすと考えられた。本研究の結果から見ると、夫婦間葛藤からネガティブな養育態度である放任的な

養育態度を経て子どもの問題行動への影響が見られなかったため、今後さらなる研究が必要と考える。

一方、夫婦間サポートが子どもの問題行動に影響を及ぼすとき、権威主義的な養育態度が媒介することが確認されたことから、仮設2を不支持と考えられる。夫婦関係は養育態度を媒介し子どもの抑うつとの関連を検討した菅原ら (2002) の研究では、夫婦間の母親から父親への愛情の強さが子どものへの暖かい養育につながり、子どもの抑うつを弱めることが示されたのに対して、本研究では夫婦関係のポジティブな側面である夫婦間サポートはネガティブな養育と関連し、子どもの問題行動を弱めることが示された。その原因は、先行研究と異なる夫婦間サポートという視点を取り入れることであると考えられる。夫婦関係満足度や愛情尺度を用いて夫婦関係の良好さを捉える研究は数多くあるが、本研究では子育てに焦点を当てた尺度を用いて夫婦関係を測定していることから独自性があると考えられる。

子どもの初期の社会性の発達は、就学前の時期の家族の状況に大きく依存している。就学前の子どもを対象とした先行研究では、子どもの行動問題は、その後の人生において長期的な困難をもたらす可能性があることが示されている (Mak, Yin, Li. et al., 2020)。親は子どもの主な養育者として、子どもの身体的心理的ニーズを満たす必要があり、子どもとの接し方は、子どもの心理的健康に影響を与える。家族状況、養育行動、子どもの心理的健康が相互作用するかに関係する可能性を確かめるのが重要である。本研究の結果は、夫婦間葛藤のみで子どもの問題行動が起こるのではなく、養育態度が媒介することによって子どもの問題行動に影響を及ぼすことが示された。こうした養育態度を経由した夫婦関係が子どもの発達に及ぼす影響について今後さらに検討する必要があると考えられる。

本研究の課題として、今回は母親の視点から調査を行い、検討してきたが、今後父親と母親のどちらかを絞って検討するより、父親と母親両方を視野に入れて検討する必要があると考えられる。コロナ禍における環境変化そして働き方改革をきっかけに、まだ十分とは言えないものの、父親が家庭や子育てに少しずつ向き合いやすくなってきているようである (ベネッセ教育総合研究所, 2020)。今回は母親の就労形態を統制できなかった。労働時間や就労の有無も

子どもの発達に関わっていると考えられるため、これらの要因を統制して検討する必要がある。また、本研究は夫婦間サポートという肯定的な側面について検討してきたが、指導的養育態度の媒介効果を確認できなかった。今後はサンプルサイズを増える上で検討を行うことが必要であろう。

引用文献

- Achenbach, T., & Edelbrock, C. (1978). The classification of child psychopathology: A review and analysis of empirical efforts. *Psychological Bulletin*, **85**, 1275-1301.
- ベネッセ教育総合研究所 (2020). 乳幼児の生活と育ちに関する調査2017-2020
- Campbell, S. B. (1995). Behavior problems in preschool children: a review of recent research. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **36**(1), 113-149.
- Campbell, S. B. (2006). Maladjustment in Preschool Children: A Developmental Psychopathology Perspective.
- Carlo, G., Mestre, M. V., Samper, P., Tur, A., & Armenta, B. E. (2011). The longitudinal relations among dimensions of parenting styles, sympathy, prosocial moral reasoning, and prosocial behaviors. *International Journal of Behavioral Development*, **35**(2), 116-124.
- Cole, D. A., & Rehm, L. P. (1986). Family interaction patterns and childhood depression. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **14**, 297-314.
- Eisenberg, N. (1982). *The development of prosocial behavior*. New York: Academic Press.
- Eisenberg, N., & Mussen, P. (1989). *The roots of prosocial behavior in children*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Eldik, W. M., de Haan, A. D., Parry, L. Q., Davies, P. T., Luijk, M. P. C. M., Arends, L. R., & Prien, P. (2020). The interparental relationship: Meta-analytic associations with children's maladjustment and responses to interparental conflict. *Psychological Bulletin*, **146**(7), 553-594.
- Emery, R. E., & O'Leary, K. D. (1982). Children's perception of marital discord and behavior problems of boys and girls. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **10**, 11-24.
- Erel, O., & Burman, B. (1995). Interrelatedness of marital relations and parent-child relations: A meta-analytic review. *Psychological Bulletin*, **118**, 108-132.
- Fincham, F. D. (1998). Child development and marital relations. *Child Development*, **69**, 543-574.
- Hirshfeld-Becker, D. R., Biederman, J., Henin, A., Faraone, S. V., Davis, S., Harrington, K., & Rosenbaum, J. (2007). Behavioral inhibition in preschool children at risk is a specific predictor of middle childhood social anxiety: A five-year follow-up. *Journal of Developmental & Behavioral Pediatrics*, **28**, 225-233.
- Krishnakumar, A., & Buehler, C. (2000). Interparental conflict and parenting behaviors: A meta review. *Family Relations*, **49**(1), 25-44.
- McCoy, K. P., George, R. W., Cummings, E. M., & Davies, P. T. (2013). Constructive and destructive marital conflict, parenting, and children's school and social adjustment. *Social Development*, **22**, 641-662.
- Mak, M. C. K., Yin, L., Li, M., Cheung, R. Y.-h., & Oon, P.-T. (2020). The relation between parenting stress and child behavior problems: Negative parenting styles as mediator. *Journal of Child and Family Studies*, **29**(11), 2993-3003.
- 直原康光・安藤智子 (2021). 離婚後の父母コペアレンティング, ゲートキーピング尺度の作成と子どもの適応との関連 教育心理学研究, **69**(2), 116-134.
- 野寄茉莉・中村沙樹・齋藤慈子 (2014). 日本語版養育スタイル尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 日本心理学会第78回大会
- 大森賀乃 (2015). 文化的文脈から見た乳幼児期からの養育環境についての考察 東京大学大学院教育学研究科紀要, **55**, 207-215.
- Parkes, A., Green, M., & Mitchell, K. (2019). Coparenting and parenting pathways from the couple relationship to children's behavior problems. *Journal of Family Psychology*, **33**(2), 215-225
- Patterson, G. R., DeBaryshe, B. D., & Ramsey, E. (1989). A developmental perspective on antisocial behavior. *American Psychologist*, **44**, 329-335.
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフトHAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, **1**, 59-73.

- Stormshak, E. A., Bierman, K. L., McMahon, R. J., & Lengua, L. J. (2000). Parenting practices and child disruptive behavior problems in early elementary school. *Journal of Clinical Child Psychology*, **29**, 17-29.
- 菅原ますみ・北村俊則・戸田まり・島悟・佐藤達哉・向井隆代 (1999). 子どもの問題行動の発達：Ex-ternalizing な問題傾向に関する生後11年間の縦断研究から 発達心理学研究, **10**(1), 32-45.
- Sugawara, M., Sakai, A., Sugiura, T., Matsumoto, A. (2006). SDQ: The strengths and Difficulties Questionnaire. Retrieved from <http://www.sdqinfo.com>
- 菅原ますみ・八木下暁子・詫摩紀子・小泉智恵・瀬地山葉矢・菅原健介・北村俊則 (2002). 夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連——家族機能および両親の養育態度を媒介として—— 教育心理学研究, **50**, 120-140.
- 戸田須恵子 (2006). 母親の養育態度と幼児の自己制御機能及び社会的行動との関係について 釧路論集：北海道教育大学釧路校研究紀要, **38**, 59-69.
- 戸々崎泰子・坂野雄二 (1997). 母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応に及ぼす影響 教育心理学研究, **45**(2), 173-182.
- 内田伸子 (2008). よくわかる乳幼児心理学 ミネルヴァ書房
- van Lier, P. A. C., Vitaro, F., Barker, E. D., Brendgen, M., Tremblay, R. E. & Boivin, M. (2012). Peer victimization, poor academic achievement, and the link between childhood externalizing and internalizing problems. *Child Development*, **83**, 1775-1788.